

室町戦国期の 見玉・深谷地域の

本庄早稲田の杜ミュージアム第一回企画展
本庄早稲田の杜 地域連携展覧会

室町時代、
利根川右岸に位置する見玉・深谷地域は、
軍事的・政治的・経済的に重要な位置をしめていた。
上杉氏や後北条氏などの戦国大名にとって、
この地の在地武士層を引き入れることが
東国を支配するうえで
軍事的に大きな意味をもつことになる。
その人々の生活とは。
本庄市・美里町・神川町・上里町・
深谷市・早稲田大学が連携し、
「室町・戦国期の見玉・深谷地域」と題し、
各地域から出土した考古資料を展示する。

見玉・深谷地域



早稲田大学キャラクター
「WASEDA BEAR」



本庄市マスコット
「はにほん」



上里町マスコット
「こむぎっち」



埼玉県深谷市
イメージキャラクター
「ふっかちゃん」



美里町マスコット
「みむりん」



神川町マスコット
「神じい」「なっちゃん」

共催

本庄市教育委員会・美里町教育委員会・神川町教育委員会
上里町教育委員会・深谷市教育委員会・早稲田大学

問い合わせ

本庄早稲田の杜ミュージアム

Website / <https://www.hwmm.jp/>
E-mail / hwmm@city.honjo.lg.jp TEL / 0495-71-6878



早稲田大学
WASEDA University

五十子陣跡（本庄市東五十子ほか）

五十子陣は1454(享徳3)年に始まった享徳の乱に際し、上杉氏によって築かれた陣である。構築年代は1457年頃と推定され、長尾景春の乱によって解体に至るまでの約20年間、上杉方の本営が置かれていた。



写真1 五十子陣の立地

陣の中心部は、市内東五十子の小山川と女堀川に挟まれた本庄台地の北東端に位置し、台地の縁辺をなす高低差約5mの断層崖を正面の防御線としている。『武蔵鑑』掲載の「五十子古城図」には、身馴川(現小山川)と女堀川に囲まれた一角に、「堀」や「大手」、城内にあった「稲荷社」の位置が記されている。現在、これらの陣の遺構はほとんど見ることはできないが、昭和30年頃までは土塁の一部が残存していたといわれる。また、「五十子古城図」に描かれた「大手」は、台地上から眼下の低地に下る切り通しの現道として残り、「稲荷社」も台地の縁辺に現存している。この付近一帯は、現在、本庄市東五十子となっているが、同地



図1 五十子古城図
(福島東雄「武蔵鑑」をもとに作図)

内には「城跡」・「赤坂」・「城下」など、城郭に関連する小字名が残されている。



写真2 五十子陣跡遺構検出状況

五十子陣関連の遺跡は多くが女堀川や小山川に沿った本庄台地上に立地しているが、深谷市六反田遺跡や同熊野遺跡のように本庄台地東方の小山川沖積地や、櫛挽台地においても確認されている。陣の中心に近い東五十子遺跡では、縦横に走行する区画溝・方形竪穴・井戸など多くの遺構が検出され、大型品を含む大量の「かわらけ」のほか青磁・白磁・天目茶碗・播鉢・内耳鍋・火鉢・硯・温石といった多彩な遺物が出土している。また、東本庄遺跡では青磁、白磁、天目茶碗、硯、六反田遺跡では内耳鍋、火鉢、硯が大型「かわらけ」とともに出土し、東五十子遺跡と相似の遺物組成が見られる。さらに、群馬県太田金山城主岩松家の陣僧で、東五十子増国寺の住持であった松陰の回想録「松陰私語」には、上杉方が戦力を配置した地点として、小和瀬、牧西、堀田、滝瀬など、五十子陣東北方の低地帯に現存する地名が見える。これらの資料から、東方の古河方に対して、上杉方は上野と武蔵・相模を結ぶ要路であった鎌倉街道の防御を目的として、本庄台地と櫛挽台地に布陣し、両台地の狭間の小山川口は榛沢六反田周辺で閉塞して断層崖を利用した防護線を敷くとともに、小山川筋、女堀川筋の台地奥部の要所に拠点を設け、陣北東の低地帯の村々にも前哨を置く縦深防御の態勢をとっていたことがわかる。五十子陣関連の遺構はこれまでよりさらに広い範囲で確認される可能性が高く、今後の調査の成果が期待される。

(本庄市教育委員会 太田博之)

新倉館跡の調査（美里町南十条）

新倉館は美里町南十条字新倉の小山川によって形成された自然堤防上に立地する室町時代の居館跡である。昭和54(1979)年度に、圃場整備事業に伴って実施された発掘調査によって、二重の堀を巡らせた典型的な中世の「方形館」であることが明らかにされた(図1)。

調査は内郭南西側約1/4と外堀の南西隅から南側中央にかけての範囲が面的調査の対象とされ、その他は内郭の中心から四方に設定した4本のトレンチによって確認調査が進められた。その結果、①全体が東西130m以上、南北150m以上の規模を有すること、②内郭は東西長61m、南北長73mで、南辺が主軸に対して傾き、歪んだ長方形を呈すること、③内堀は内郭南側で幅8.2m、下幅1.8m、確認面からの深さは1.8mで、断面形は薬研堀状を成し、地割から推測して内郭に沿って、約8m幅で均一に巡っているらしいこと、④外堀は東・西・南側で幅約25mの規模を有するが、南東隅は外堀が鉤の手状に内側へ屈曲し、外堀の幅が極端に狭まり、南西隅でも西側外堀が内郭主軸に一致せず、西方に触れているため隅切状を成すこと、⑤外堀は南側中央部で上幅5.2m、底面幅0.65m、表土面からの深さ1.6mで、内堀に比べ浅いことなど凡その規模と形状を把握することができた。

内郭の調査区では、柱穴群・列状集石遺構・粘土堆積遺構・土坑などが検出されている。柱穴群からは、6棟分の掘立柱建物が復原され、粘土堆積遺構については、館跡に伴う土塁であった可能性は低いと考えられている。



写真1 新倉館跡全景(北西から)

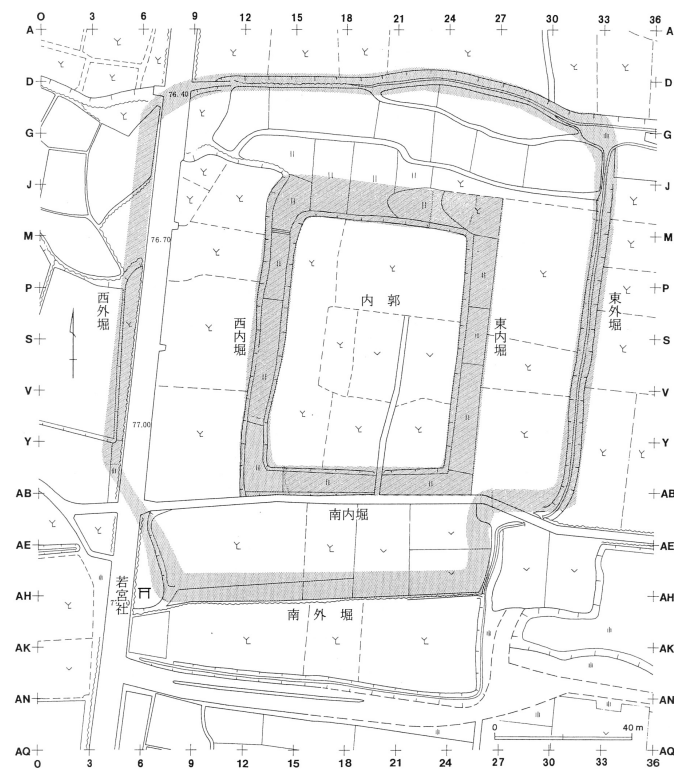


図1 新倉館跡跡推定図

遺物は外堀、内堀、内郭から内耳鍋、播鉢、ロクロ成形回転糸切りの「かわらけ」、火鉢、天目茶碗、青磁、石臼、漆塗椀の被膜、曲物、サザエの殻などが出土している。内堀と外堀からの出土量が多く、とくに南外堀では多数の内耳鍋が発見されている。「かわらけ」はロクロ成形で、外底面には回転糸切りの痕跡が観察される個体が多い。灯明皿として使用され、口縁部にタール状の漆黒色の煤が付着する個体が含まれている。播鉢は還元焼成の個体と酸化焼成の個体が併存している。内郭では掘立柱建物跡から数点の「かわらけ」の他、少数の内耳鍋・播鉢・火鉢の破片が検出されている。

新倉館は調査前まで中世の館跡とは認識されていなかったという。伝えられた文献資料は存在せず、地元でも居住した氏族に関する伝承は残されていない。確認された遺構の形態や規模から、在地的な武士階級の館跡と考えられるだろう。構築年代を確定する資料は得られていないが、出土した内耳鍋などの型式から、15世紀には館として機能していたことが推定される。

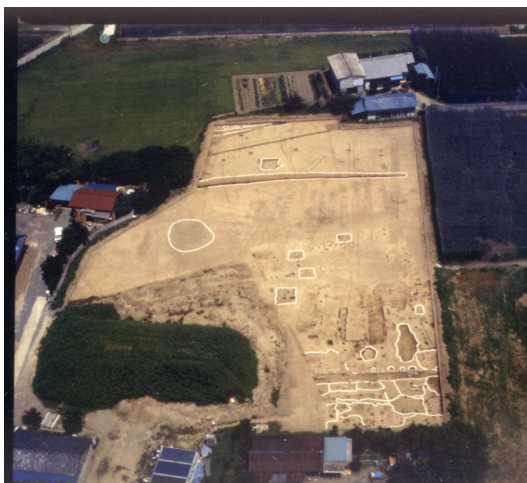
(美里町教育委員会 池田匡彦・中沢良一)

安保氏館跡（神川町元阿保）

安保氏館跡は、神川町元阿保にあり、鎌倉時代初頭から戦国時代末まで続く安保惣領家の居館跡と考えられている。鎌倉時代の惣領家は鎌倉幕府滅亡と共に滅び、その後は分家筋が惣領家を継いでいる。戦国時代の安保氏は、在地土豪を家臣団として編成し、小大名的な存在になるが、永禄12年(1569)の御嶽城をめぐる後北条・武田両軍の攻防戦以降没落したと考えられている。

発掘調査は昭和63年と平成4年に行われ、館跡の規模が東西約160m、南北約230mになることがわかった。室町時代の館跡は、堀跡、掘立柱建物跡、井戸跡、鍛冶遺構があり、「かわらけ」、常滑の甕・壺などが出土している。

戦国時代になると館跡は、内堀と土塁などにより複郭化し、内郭の中に、溝、竪穴遺構、石垣状遺構、土坑、井戸跡がある。遺物の出土は多く、内郭にあるSD14と15から在地産の「かわらけ」、内耳鍋、国産陶磁器として瀬戸産の鉄釉皿、鉄釉折縁皿、灰釉皿、天目茶碗、播鉢、中国陶磁器などがある。中国陶磁器の出土は多く、器種には景德鎮系の青花碗・坏・鉢・皿があり、時期は15世紀後半から16世紀中葉である。



安保氏館跡

皂樹原・檜下遺跡（神川町元阿保）

安保氏館跡の東南東にある皂樹原・檜下遺跡は、神川町元阿保と上里町大御堂にあり、昭和58年～62年と平成21年に発掘調査が行われ、阿保境の館跡の他



阿保境の館跡(北側)

に、鎌倉時代から戦国時代にかけての掘立柱建物跡、竪穴状遺構、ピット群・柵列跡、火葬土坑、土坑、溝跡が数多くあり、当時の安保郷に含まれていることから、安保氏と繋がりが深い遺跡であったと考えられている。

阿保境の館跡は、13世紀から15世紀前半まで続くが、室町時代の館跡の規模は、外堀が東西約160m以上、南北204m以上で、北西の隅から南に約130mのところに入口の土橋がある。内部の構造は北側に溝で区画された掘立柱建物跡と井戸跡があり、南側には掘立柱建物跡、柵列跡、土坑、溝跡がある。柵列跡は、外堀と並行するように外側にあり、土橋付近で見つかった溝は道路跡と考えられている。出土遺物には、備前の播鉢、常滑の甕、在地の片口鉢やこね鉢などがあるが量は少ない。調査の結果、館跡は、「市」としての機能を持っていたと考えられている。



西辺の外堀(土橋付近・北から)

館跡の西約40mのところには館跡に付属するピット群や柵列跡で囲まれた1辺約50mの方形の区画がある。土坑からは、在地の内耳鍋・片口鉢、備前の播鉢、瀬戸の緑釉小皿、常滑の甕などが出土している。

(神川町教育委員会 金子彰男)

堂裏遺跡-安保氏の信仰-（上里町大御堂）

堂裏遺跡は、鎌倉～室町時代に営まれた寺院跡で、上里町大御堂に所在する。平成2年に行われた発掘調査によって、寺院の基礎とされる基壇状遺構やそれに付属する池の跡が発見された(写真1)。また遺跡からは、瓦や石塔、素焼きの器である「かわらけ」が出土している。近くには、鎌倉～戦国時代に周辺地域を支配した武士である安保氏の城館址や彼らの菩提寺である吉祥院が所在する。そのため、堂裏遺跡も安保氏の信仰を集めた寺院の一つであったと考えられている。



写真1 堂裏遺跡全景

手前と奥のくぼみが池の跡で、その間が島と考えられている
・基壇状遺構と池跡

基壇状遺構(写真2)は、池跡のほとりで発見された。また、池の中央には、島が作られていたことが判明している(写真1中央部)。これらは池と合わせ、阿弥陀仏のいる極楽浄土を再現した浄土式庭園であったと考えられる。



写真2 基壇状遺構

・発見された瓦片

遺跡からは、寺院の屋根に使用されていた瓦片が大量に発見された。瓦には、軒瓦と呼ばれる装飾のために紋様が施されたものがあり、この特徴から、堂裏遺跡



写真3 出土した軒瓦

の瓦は14世紀に焼かれたものであることが判明している。

・発見された石塔類

堂裏遺跡では、墓石や供養塔として使用された板碑や五輪塔等の石塔類が大量に発見された。戦乱が多かった中世において、人々は仏教に心の癒しをもとめたことがわかる。



写真4 発見された石塔類

また、これらの中には作られた年代が記されたものがある。堂裏遺跡では、古いもので建武2年(1335年)、新しいもので文明11年(1479年)の年号が記されており、遺跡が営まれた年代を知る手がかりになっている。

・発見された「かわらけ」

「かわらけ」は、祭祀や宴会等で利用された素焼きの器で、使用後はその場で廃棄された。堂裏遺跡で発見された「かわらけ」は、その特徴から15世紀頃に作られたと考えられる。

・発見された木製品

池の底からは中世から近世にかけて使われた木製品が多く見つかった。中でも写真5の木製品は、五輪塔状に加工されており、卒塔婆のような形をしている。



写真5 木製品

長浜城址出土埋納銭—長浜氏の軍資金？—

長浜城址は、上里町長浜に所在し、周辺地域を支配した武士である長浜氏の居館であったと伝えられている。遺跡近くの竹藪からは1529枚にのぼる古銭が発見された。これら古銭は室町～戦国時代に貨幣として利用されていたもので、その時期に埋められたものと考えられている。このことから、長浜氏が戦いのために隠した軍資金の可能性が想定される。

(上里町立郷土資料館 林 道義)

深谷城跡（深谷市本住町ほか）

深谷城は、山内上杉氏の流れをくむ宍鼻和上杉氏が、古河公方と対抗するために築いた平城で、櫛挽台地北端部に立地し、小河川や低湿地に囲まれた要害である。宍鼻和上杉氏5代目惣領の上杉房憲によって、康正2年（1456年）に築かれ、その形が木瓜の花あるいは実の断面に似ており、別名「木瓜城」と称されたとも伝えられている。

山内上杉氏が没落後は、北条氏、上杉氏の狭間で度々主家を替えながら存続していき、豊臣秀吉の小田原征伐による深谷城開城後は、徳川家康の家臣松平康直が一万石で城主となった。その後城主が度々代わり、1627年に城主酒井忠勝が川越に移った後、1634年に廃城となった。

発掘調査では、堀や土塁、井戸、掘立柱建物跡が確認され、堀跡からは木製品や漆器などの台地上では残りにくい遺物が多数出土した。また、北部を中心に障子堀という特殊な構造の堀が多くの地点で確認されており、この城跡を特徴づけている。

熊野遺跡 第152次調査（深谷市岡）

熊野遺跡は、櫛挽台地北西端に位置し、古墳時代から中世にかけての各時期の遺構が密集する複合遺跡である。

熊野遺跡第152次調査地点は、遺跡の北西部に位置し、調査地点から北西約2kmの地点には、本庄市の「五十子陣」が位置している。本調査地点では、溝に囲まれた建物群が確認され、「かわらけ」や六道銭と考えられる宋銭が出土する墓坑も検出されている。これらの遺構は、出土した土器類から15世紀代のものとみられている。また、本調査地点の周辺には、「城下」や「二ノ丸」といった地名が残り、五十子陣とも関係が深い遺跡と考えられている。

（深谷市教育委員会 平野哲也）

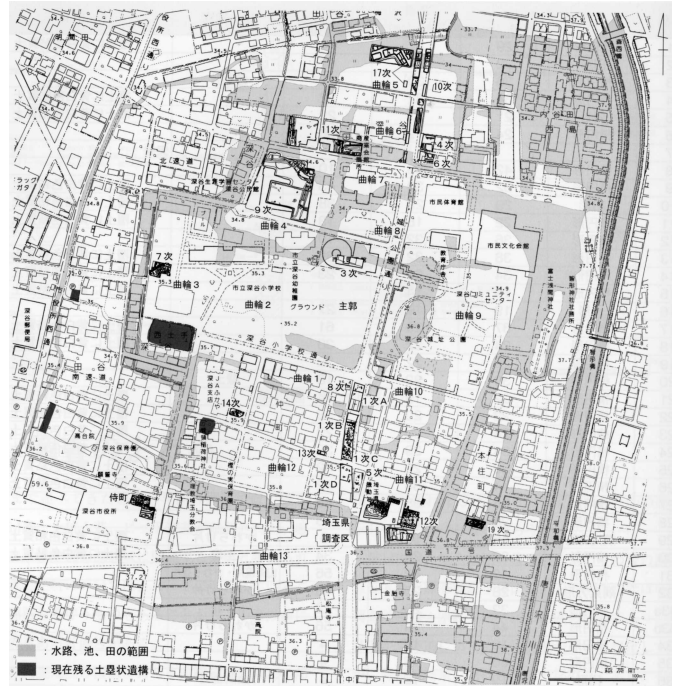


図1 深谷城跡調査地点分布図



写真1 深谷城跡第9次全景写真

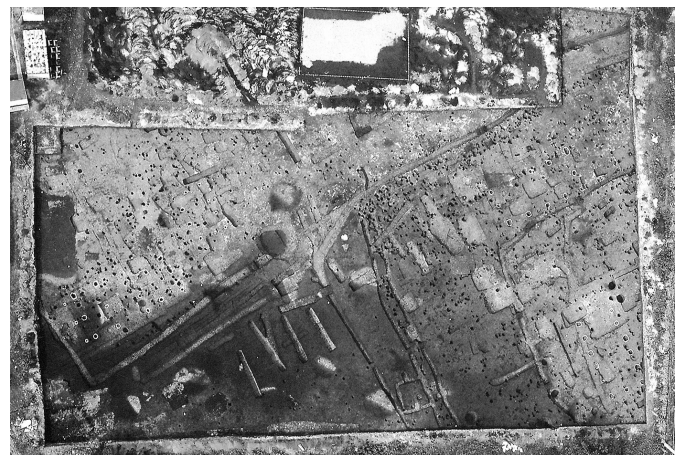


写真2 熊野遺跡第152次全景写真

しもとつか

下戸塚遺跡（東京都新宿区西早稲田）

下戸塚遺跡は、神田川に臨む低位段丘平坦面に立地する。武蔵国荏原郡牛込郷富塚にあたる。

下戸塚遺跡からは、掘立柱建物31棟、床面状遺構、柵列、井戸6基、地下式壙6基、土坑32基、溝、方形周溝状区画溝1基などを検出した。

遺物は、中国陶磁器（青磁・白磁・青白磁・天目茶碗）、国産陶器（瀬戸・常滑・備前・東播磨系）や瓦質土器など、碗、皿、盤、鉢、こね鉢、すり鉢、燭台、甕、火鉢、土釜、風炉、「かわらけ」が出土した。井戸からは漆器椀、曲物、烏帽子が出土し、地下式壙からは909枚の銭貨を検出した。

掘立柱建物などの主要な遺構の時期は、13世紀中葉から15世紀中葉に比定されている。掘立柱建物群に関しては、規模からみて、いわゆる居館を構成する建物と考えられる。



写真1 下戸塚遺跡全景

しもやぎざわ

下柳沢遺跡（東京都西東京市東伏見）

下柳沢遺跡は、石神井川左岸の低位段丘緩斜面に立地する。この一帯は武蔵国新座郡に属する。

下柳沢遺跡からは、中世において関東屈指の地下式壙群42基が検出され、板碑100点など空白の地域史を塗り替えた。他に井戸25基、土坑70基、ピット群、溝、道状遺構などを検出している。

地下式壙群は、14世紀中葉から15世紀中葉に営まれたと推定されている。地下式壙群全体は、斜面地をなすやや高位の段丘上の北側の一群と、より低位の段丘上の南側の一群の2群に大きく分けることができる。南側の一群には、ローム層の上位の黒褐色土を天井と



写真2 下柳沢遺跡南側調査区

するものが含まれ、総じて天井高が低く、竪坑も簡略化している。

遺物は中国陶磁器（青磁・白磁・明染付）、国産陶器（緑釉・瀬戸・美濃・常滑）や瓦器、瓦質土器、白瓷系などの碗、皿、鉢、こね鉢、すり鉢、燭台、壺、甕、茶釜の蓋、土鍋、「かわらけ」や茶臼、穀物臼、砥石、転用砥石、瓦、木製品、漆製品が出土している。



写真3 1号井戸遺物出土状態

板碑の多くは、井戸などに廃棄された状態で出土している。板碑は、近接した白子川流域が題目板碑なのに対し、豊島氏の勢力圏である板橋区、北区、練馬区の石神井川流域はキリークを種子とする板碑が主流である。豊島氏の盛衰と連動するかのよう、板碑の種子の大きさは次第に縮小している。

下柳沢遺跡の板碑は、紀年銘が確認できるものに嘉暦3(1328)年と応安2(1369)年があり、14世紀中葉から後半のものが多く、15世紀に至り減少する。その傾向は、地下式壙のあり方と同じである。

（早稲田大学 井上裕一）

本庄市・美里町・神川町・上里町・深谷市の
戦国・室町時代のおもな遺跡

● 遺跡 ◆ 文化財展示施設

各市町村の文化財展示施設

- 上里町
 - ◆ 1 上里町立郷土資料館
- 神川町
 - ◆ 2 神川町中央公民館 第2 展示室
 - ◆ 3 神川町多目的交流施設 展示室2・3
- 本庄市
 - ◆ 4 日本庄商業銀行煉瓦倉庫 展示スペース
 - ◆ 5 本庄早稲田の杜 ミュージアム
 - ◆ 6 競進村模範蚕室
 - ◆ 7 梶保一記念館
 - ◆ 8 文化財整理室 文化財展示コーナー (不定期開催)
- 美里町
 - ◆ 9 遺跡の森館 考古資料常設展示室
- 深谷市
 - ◆ 10 茨沢栄一記念館
 - ◆ 11 日本煉瓦史料館
 - ◆ 12 川本出土文化財管理センター

